

令和3年度第2回総合教育会議議事録			
日時	令和4年2月2日 13:30~15:50	場所	真庭市役所3階会議室
出席者	市長 : 太田 昇 教育長 : 三ツ宗宏 教育委員 : 井口利美、常本直史、徳山周一 政策アドバイザー : 荒瀬克己、山下陽子、山本健慈 オブザーバー : 吉野奈保子、大岩功(ともに郷育魅力化コーディネーター)		
議題	調整事項 ・真庭市幼児教育施設整備方針について(市長部局提案) ・第3次真庭市教育振興基本計画について(教育委員会提案) 協議事項 ・真庭市の教育環境の魅力化について		
経過及び結果	<p>○市長：あいさつ</p> <p>今日はお集まりいただき、ありがとうございます。</p> <p>今年度2回目になります。8月には高校魅力化について議論していただきました。高校教育も幼児教育から子どもの育ちの連続性の上にあるのですから、地域全体で子どもを育み、一人ひとりが幸せになるような能力を最大限伸ばせるよう、県立高校も、地域にある学校として子どもを育てていこうと話しました。今日もこれをメインテーマとして話したいと思っています。</p> <p>来年度の入学動向は、子どもが思っている成果がまだ出ていない。しかし、悲観的になるのではなく、個別にみると、蒜山校地では志望者が増えているし、ほかのところでもその芽はあると思っている。不十分なところは分析して、克服するようなことを考えて、緊急で対応しないといけないことと、理念はきちんと持って長期的に取り組むことに分けて、ご議論していただいて、必要があれば高校にも伝えて、一緒になって真庭の高校をより魅力あるものにしていきたいと思っています。</p> <p>本日は、調整事項が2点、幼児教育施設と真庭市教育振興基本計画をお願いしたい。これを先に議論していただき、そのあとに自由闊達に議論をしていただきたいと思っています。</p> <p>今日は、教育委員だけでなく、政策アドバイザーと郷育魅力化コーディネーターのお二人にも来ていただいている。よろしくお願いします。</p> <p>公開の会議で、議事録も公開していますので、よろしくお願いします。</p>		

**○真庭市幼児教育施設整備方針について（市長部局提案）**

**市長：**：それでは、お手元に資料をお配りしていると思います。

真庭市幼児教育施設整備の基本方針について。子育て支援課から説明をお願いします。

**石田子育て支援課長：**資料について説明。

**市長：**事務局の方から説明でした。

最初に申し上げればよかったのですが、政策アドバイザーやコーディネーターの方は別ですが、会議の構成員については、この調整事項二つについて合意ということになりましたら、地方教育行政の組織および運営に関する法律、それと真庭市総合教育会議設置要綱において、会議の合意事項について相互の尊重義務が規定上生じますので、お伝えします。

質問は、どなたからでも結構ですが。構成員以外の方もどうぞ。

**荒瀬先生：**一点よろしいでしょうか。幼児教育と小学校教育の接続の話です。

今、国では中央教育審議会が、初等中等教育分科会の中に、幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員というのを設けて、脳科学の観点含めて、発達ということを考えた上で、幼児期の学びと小学校に入学して以降の、いわゆる学校教育における学びとの接続をどう円滑に図っていくかということの議論をしています。いずれその架け橋プログラムができて、全国にお届けするということになっている。

その議論の中で、特に非常に重要なんだけどなかなかできてないというのが、幼児教育の担当者と小学校教育の担当者が十分に協議をすると「場の不足」、あるいは「時間の不足」ということがよく言われています。今のご説明の中にもありましたし、ここで特に、幼児教育と小学校教育の間で、単なるお互いを意識するっていうところにとどまらずですね、もっと深くやっていくんだということをお示しいただいてると思います。その具体の話をご紹介いただけるとありがたい。

これは真庭市という地域の中でこそできることで、お題目のように「大事ですよ」と言ってもあまり意味がありません。具体的に幼児教育施設あるいは幼児教育関係者と小学校の先生方、保護者の方を含めて、どんなふうな形でやられているのか、ご紹介いただきたいと思います。

**市長：**ありがとうございます。

幼児教育としてこども園のほうと、それから教育委員会の今の現状と、それから今後どうしようしてるのか、その二つについて両方からお願いします。

**石田子育て支援課長：**園のほうから説明いたします。

園では、学校との接続を意識しまして、まず年間指導計画というものを作成をして

います。それから、教育委員会と合同で、アプローチカリキュラム・スタートアップカリキュラムを作成しており、現在は、このカリキュラムに沿って、連続性に努めているところです。今、おっしゃられましたように、交流会とか研修会でとどまっている自治体が多いのが現状だと聞いておりますし、先日、専門家の方からもそのようなご意見をいただいたところです。

そのカリキュラムの整合性をさらに図っていくとか、先生と職員との話し合いのような、そのような場が今以上に持てるようにしていきたいと考えております。

**秋元学校教育課長：**アプローチカリキュラム・スタートアップカリキュラムについて、小学校、園で先日も合同研修会を実施をしまして、共有したところです。先ほどお話にもありましたが、一つの形を作ることに合わせて、日常的に、年に1度ではなく、子どもたちの様子を参観に行ったり、情報共有を行っている学校や園もあります。ただ、地域によっては学校と園との距離があることもあって、その機会が少ないところもあると聞いていますので、今後その対処を考えていきたいと思っています。

**荒瀬先生：**今おっしゃった後の方の学校教育課の方のご説明の中で、日常的にいろいろと交流をなさってるというケースもあるんだけど、一方で、距離があって、なかなかできないんだというのは、これも現実的な問題だと思います。

ただ、その距離があったとしても、幼児教育で終わってしまう子どもは1人もいないので、その園から必ず小学校に行くわけですね。ですから、その子どもがどのような場で学び重ねていって成長していくのかという、その子どもの視点に立つと言いますか、子どもを主語にした形で見えていく必要がある。

距離があるので、先生方が交流できないという学校等、幼児教育施設であれば、その幼児教育施設からそのままには多分行かれないんでしょうね、距離があって。大人でも一緒にできないのであれば、子どもの方が通えるっていうのはちょっと考えづらい。

ただ、しかし実は通うんだということであれば、距離があったとしてもですね、やっていただく必要がある。その際、先生方の仕事の量であるとか、時間であるとかといったことも考えなければならないのは当然のことですけれども、一方で子どもを主語にしたときにどうなのかというのを考えていくことが重要かと思います。

架け橋特別委員会の議論では、お互い頭ではわかってるけど、子どもの行動とかを見ていく中で、幼児教育を担当する先生方の思い、遊びを中心に学びを重ねていくというそのことが、小学校教育の関係者の皆さんになかなか理解してもらえない。だから、幼児教育段階でずっと遊びばかりだから、学校に来ても教室でちゃんと席に着けないんだ、という思いになっている小学校教育の先生方もいらっしゃる。その、一番に認識の垣根というのを低くしていくとか、あるいは乗り越えていくということが大事だと思いま

す。これらを幼小だけじゃなくて小中、中高もそうなのでしょう。そういったことについても、またご検討いただければなということをおもいました。

**市長**：それでは大岩さん、「もりのようちえん」をやっている立場からどうでしょうか。

**大岩 C**：いくつか今の話によせて、既に行われて実践を紹介しつつ、議論が広がればと思います。

小さなところから言うと、中和地区の小学校と保育園が、ちょうど裏山を挟んで反対側にあるんです。その裏山を少し整備すると、子どもの足ですぐに歩いていける距離にあるんです。今年の低学年ですね、生活科の授業を使われまして、そこを小学校の方から保育園に歩いて行って、交流して途中遊んで帰る。その後、面白かったり発見したものを「すごろく」化して、保育園の子たちを連れて遊ぶ。小学校でそういう遊びを使った活動をされてらっしゃった。非常に立地的にやりやすかったというもありますし、そういう思いがある先生がおられます。こういう取り組みが広がっていくと、素晴らしい話になっていくと思いました。

年 5 回だったんですけども、環境教育施設津黒ふれあいの里と「もりのようちえん」風の週末イベント型の自然保育をやっておりました。そのとき、意見交換会を保護者の皆さんとした。もっとこういう自然体験を取り入れてやってほしいという声がたくさん上がってきておりますし、参加者数もずっと増え続けております。この 2 月 6 日予定にされてるんですけども、雪の中でも参加したいという声があります。

そこで繋がった保育士の先生方から、市内の保育園で、来年度ぜひその職員を交えて研修がてら、もりのプログラムをしていただけないかという話もあるので、順次、若手の方々と一緒に自然体験ができていければと思っています。

**吉野 C**：今のことに関連してですが、資料の中には、真庭市の恵まれた自然環境を生かした教育をするということが書かれています。多くの保育園の園長先生が再任用の方が多く、やはりなかなか子どもたちを自然の中に連れ出すということに関して、不安を感じたり、安全管理の部分でどうしたらいいんだろうと不安を感じておられると思います。もし真庭市としてこういったことを進めていくということならば、大岩さんからも研修という話もあったが、安全管理や指導方法についてきちんと指導や応援をしていくとか、あるいは、里山に出るのに距離があるということあれば、バスを出すとか補助があるとか。例えば、自然環境を生かしたいのであれば、それを応援していく仕組みというものを実践するのほうで考えていただければ、園の先生方は前向きに取り組まれるのではないかと思います。

**山本先生**：このテーマについては、1 月に事前の検討会に出て、意見を申し上げました。

私は、大阪府熊取町で二つの保育所を経営しておりまして、私の保育所が広く知られているということで、旧落合町のときに町会議員の皆さんや保育士の皆さん来られたこともありますし、私の保育所の責任者が落合に研修会に行ったといっていたので、ご記憶の方もいると思う。二つほど申し上げたい。

一つは、今日の議題は保育園の内容の話になっていますが、真庭市としての保育行政をどう考えるかということなんです。保育所というのは民間であれ公立であれ、厚生労働省の基準に従って経営されています。その基準に従って費用を国が負担しているので、基本的には同じ事なんです。その検討会でも言ったんですけども、自治体立の保育所の保育士は、公務員ベースの給与が保証されているけれども、そのベースの給料は厚労省の補助金では到底賄うことができない。民間だと給与が月額 10 万円ぐらい低くなっている。この問題をどういう風に考えるかということがあるんです。今、保育行政で一番問題となっているのは、民間事業者がどんどん増えているんですけども、エッセンシャルワーカーと言われている保育士の労働基準をどんどん下げると言うことになっているんです。(保育士の労働環境に対して)十分なケアがされていないという問題があります。これを例えば真庭市はどうするのか。それは自治体の財政が対応することになるんです。そういう意味では、公立も民間も設立の形態は違うけれども同じ問題を抱えている。公立なら保育ニーズの多様化ができないという理屈は全くない訳で、休日保育とか夜間保育を民間に委ねて、公立が全くやらないという理屈はないんです。厳しいニーズの対応こそ自治体が行っていただきたい。このあたりの問題がどうかということがあります。保育行政の責任というものを、自治体としてどう考えるかということを考えていただきたい

今コロナが非常に感染が広がっておりますので、いろいろ検査をするんです。うちの保育士が言っているのですが、公立保育所の子どもには検査キットが自治体から提供されているけれども、民間では自分の所で買えと言われてます。ささやかなエピソードだけれども、非常に重要なことだと思います。このあたりを保育行政としてどういう風に考えるかという問題だと思います。

もう一つ、荒瀬先生がおっしゃっていたことで、幼小の連携です。プログラムもあるんですけど、保育園というのは子どもの人生 6 年間の情報が集まっているんですね。個人情報満載です。家族の情報、子どもの個性の情報が満載です。学校からはなかなか見えないところも、保育所が 24 時間 365 日トータルの生活を見ているので、個人情報が集積されているんですね。その情報を踏まえて教師が接するのと、なくて接するのは全く違います。ご家族とも十分話をして、ご家族が自己開示すべき情報と、保育所からしっかり伝えることができることを親御さんともしっかり話をして、一人一人の子

どもについて学校に親と一緒に出向いたりして、担任の先生にしっかり状況を引き継いで、いろんな情報を引き継いで教育にあたる。そうするとトラブルが予測できますので、先生も情報を踏まえた上で対処することができます。個人に沿った教育が可能です。

**市長：**連携のことから、さらにその民間保育所の充実と民間といえども行政との関わり合いについて支援も含めて問題点をいただきました。

**石田子育て支援課長：**先日、子ども子育て会議の中で、小学校との接続で、自然を活かして子ども達と一緒に学べて、スムーズに小学校に移行できるというような環境が大切ではないかという意見が出たところでした。意見をいただいて検討したいと思っております。

山本先生の意見については、先程民間の公立であれ、運営的には同じではないかという指摘がありました。処遇が大きく違うところについても、現実として、真庭市では公立が多いということもありまして、民と公の差があるなあというふうに感じました。この辺りについては真庭市の保育行政を考えるということでさらに勉強させていただきたいと思っています。

**市長：**私の方から市長という立場でお話します。

今回この指針を作るということで、公立が20で民間が1つあります。民間は民間の良さ、公立には公立の良さや特徴がある。民間が増えてくるという中で、民間の所に土足で入ることはできないけれども、公立が民間とより連携をし、民間の良さがさらに伸びるような意味での条件整備は可能だろうし、それを意識してやっていきたいということで指針を作っています。

処遇改善の関係では、それで十分ということではないですけれども、私立については国の方も混乱を招くような出し方ですけれども、今やろうとしているので、市としても混乱を招かない範囲で処遇改善をやっていきたいと考えております。

吉野さんの方からあったように、野外で子ども遊ばせるようなそういうことで、真庭市が私立の方にも一定の支援のようなこともできるかもしれませんし、この方針に基づいてその辺をより強めていくことができれば、私立の自主性を尊重しながら、そこに干渉しないようにしながら、その活動を支援することができれば。そういう道があれば、この方針に基づいてやっていきたいというふうに考えています。他に何かありませんか。

**山下先生：**質問です。最初に経緯のお話がありましたが、新たな民間事業者から久世地域の幼児教育施設の設置に向けて提案があったということで、今、市長からも私立、公立に関わらず、自然に親しむような教育をということでした。処遇の問題も含めて、私立の保育園が新たにできることを前提にこの方針を策定されるのでしょうか。

**石田子育て支援課長：**この度の基本方針というのは、私立を前提としたものというわ

けではなくて、公立においても、私立においても、こういった方針でもって整備をしていくというのです。もし、民間を公募する際には、こういった方針に沿ったものにするということで、決めているものです。

**山下先生**：そうした提案があったことをきっかけとして、こういう基本方針を決めておくべきではという話になったということですね。ということは、ここでは基本方針をどうするかということ議論するということですね。

**市長**：一般論で言うと、いわゆる小中学校高校も含めて、真庭市はこんな規模ですから、公立が中心です。私立があれば、それぞれの良さが生かして、というのは理想だと思っんですね。

ところが、高等学校もそうですけども、現実には難しい問題があります。私学の場合ならば、その一つの考え方の一貫性が学校の設立のときから、大学もそうですけど、設立のときから一つの方向があるわけですね。

公立の場合にはそういうわけではないというのがあります。それぞれのよさを生かすことができるのが、選択の幅が広い教育が、子育て含めて、いいんじゃないかと考えるわけです。真庭市の場合は、全ての面で公が強すぎるというのはあるんですけど。

**山下先生**：先ほど、大岩さんと吉野さんのほうから、自然体験についての、「もりのようちえん」の取り組みを聞いて、2月6日のイベントに参加してみたいと思いました。

幼小連携のカリキュラムを統一したものを作るということですが、私も実は中高でやろうとした。ただ、中学校はあまりにも忙しすぎて。幼稚園と小学校もどちらも忙しすぎて、さっき合同でそういったイベントに参加するというのも、かなり厳しい中でやるしかないと思います。

真庭の強みは、幼小中高が比較的連携しやすいこと。環境教育や自然の体験中は、理解が得られやすい。協力が得られやすい中で、ここは私がやるからあなたはこっちをやってねというような、意見の集約がしやすいのではないかと思います。みんなでやるしかないのではないかと思います。

高校では総合環境の時間が年間35時間あるわけで、その中で地域の幼児教育に関わることもできるのではないですか。幼小だけで、新しいカリキュラムを作るのは難しいので、もう少し広い視野で考えると、自然環境の体験型はできそうな気がします。

**教育長**：実は、検討のときにもお話をさせていただいたが、就学前の教育は環境による教育です。環境ということを考えたときに、真庭らしさが生きるということは、園内にも環境はあるんだけど、その外で自然をいかに生かしていくか。これを大事にしながら子どもの育ちを大事にしていく必要がある。小学校も同じだと思っている。校種間の連続も大事だが、子どもの育ちの連続を眺めていくのは保護者の方。子どもの育ちだけでなく、

子どもの育った姿をイメージするのも保護者。就学前も小学校も、親が学んだり繋がったり、子どもを応援したりする「親育ちの場」をどうやって作っていくのかというの大きな観点だと思う。

真庭の地域特性を考えれば、子どもの育ちの連続性を支えるのは、親であり、先生であり、地域。小中のコミュニティスクールを進めているが、就学前まできちんと結んで、地域全体が子どもの応援者になる。その中で子どもの育ちの連続性を担保するというようなことを考えていく必要がある。

**山本先生：**最初に申し上げた自治体としての行政責任をしっかりと明確にして、民間であれ公立であれ、ちゃんと条件を整備して、今のことを担保してほしいと思う。福祉は、最近すごく民間に丸投げしているというか、補助金の振り分け行政みたいなのところがあって、最後に福祉の質をどこで担保するのかということがある。民間事業者から見て、公務員の福祉労働の質がどんどん下がって行って、お金の振り分けだけを公務員がしているようになっている。そうならないように。

もう一つ荒瀬先生が言われていたのは、幼保だけでなく、少なくとも18歳までこの地域でどうやって人を育てていくのかという、これも地域責任というか、これも考えを確立する必要がある。保育所は、個人情報をいっぱい持っているので、例えば、小学校でトラブルが起きたり、中学校でトラブルが起きたりすると、当時の保育担当が呼び出されて、ケースカンファレンスすることがあります。一番情報を持っているから。そういう意味では、ここはもっと情報の集積しやすいと思うので、地域で子どもを育て上げるような環境を作ってほしい。

**市長：**福祉関係は、真庭市は地域でやっている。集いの場とか、地域がよくやっているところですよ。

今、公立であれ、民間であれ、真庭市の幼児教育行政を前提に、というような話もありました。一方では私立の自立性には、干渉すべきじゃないと思っています。

一番最初のところで、計画の位置づけというのが4ページにあります。基本方針を示すところの上の方に目指す教育を盛り込んでいる。ここに、公立であれ私立であれ、こういう方針でやっていきますと、いうことを、少し言葉を補充して書く。

それから、先ほど荒瀬先生から口火を切っていただきました幼児教育とそれ以降の小学校以降の連携ですね、そこについて、基本方針のところ、連携をしていくということを明記するということにしたいと思います。

案文については、こちらの方にお任せをいただきたいと思います。もちろん確定する前に事前に委員の皆様にお返しますけども、この内容で合意したということで整理させていただきませんか。よろしいですか。



**構成員**：はい。

**市長**：では事務局の方で、今言った2点について、文言を整理したうえで、事前にそれで示してもらって、最後は私が決裁しますが、これは共同でのものになりますから、両方で決めたということをお願いします。

### ○第3次真庭市教育振興基本計画について（教育委員会提案）

**市長**：それでは教育振興基本計画について教育委員会事務局からお願いします。

**浅野教育総務課長**：資料により説明

**市長**：これについてご質問ありますか。

**荒瀬先生**：第2次では5の基本目標があって、それを第3次で3つにまとめたという説明がありました。まとめたというのは、5つがたくさんあるので、まとめたってことなのだと思います。まとめた関係で、これは私だけがこういう違和感をもったのかもしれないのですが、2番目ですけれども、「真庭を愛し、心豊かなひとをつくる」という文言になっています。これは、「どんな人をつくるの」ということになって、「真庭を愛する人をつくる」んだということですよ。3次の方は、2番は「真庭を愛する心豊かな人をつくる」のか、それとも、「真庭を愛する」という行為と、「心豊かな人をつくる」という二つの行為を並べてあるのか。どっちかちょっとわかりづらい気がいたします。

私は、おそらく「真庭を愛する、心豊かな人をつくる」という意味なのではないかなと思うんですけど、「真庭を愛し」で切ってしまうと、「真庭を愛する」という行為と、「心豊かな人をつくる」という、二つのことがここに並べられている、と読む人もいらっしゃるんじゃないかなあと、気になりました。

それから、今ご説明いただいた資料2-2になるんですか、縦の10数ページある方ですけども。事前に送っていただいて拝見しておりまして、一番気になったところが、10ページから始まる「具体的な施策の方向性」の概要ということなんです。「方向性」というのは方向性ですからよくわかるんですが、「具体的な施策」、これは何か変な質問ですが、これ、具体的でしょうか？そのことが別冊のところ、これこういう事業があるから具体的なんだということになるのかもしれませんが、また逆に言うと、それぞれの、例えば、学校や教育委員会の担当される課で具体のプランを作っていく、そしてそれをきちんと振り返りながら評価してよりよいものにしていくということなのかもしれませんが、何か「具体的な施策」というと、施策の項目としては言えますけど、具体的評価として中身もよくわからない。例えば、10ページに書いてある具体的な施策の①の「誰もが安心して学べる場作りと格差ない学びの場づくり」。作っても誰も反対しないですけど、それをどうやって作るのというのは全然わからないじゃないか、という思

いを持ってしまう。これを今後どう具体的に進めていくのかというところが、どこかに明快に書いていただくというか、あるいはそういう了解ができてるならそれでいいんですけども。そこが気になったということです。

**市長**：今の質問は、大きく3点ですね、事務局をお願いします。

**浅野教育総務課長**：最初の一点目の、この真庭を愛し、心豊かな人を育てるところについて。これは真庭を愛する人、そして心の豊かに暮らす人を作るという意味です。

**荒瀬先生**：今の1点目は、まずは愛する人と心豊かな人と一緒の人ですか。

**市長**：それでは表現できていないのではないかと質問です。この表現で、真庭を愛する人というだけで、心豊かなとか、そういうことが表現できてないじゃないですかという質問だった。

**荒瀬先生**：読もうと思えば読めると思うんですけど、私のような読み方をする人はいないのかなと思ったということです。引っ付けた関係で、まとめ方をどうするかというところの問題だけだと思うんです。

例えば、「心豊かで真庭を愛する人をつくる」とかいったような表現も、考えられなくはないと思うんですね。両方とも人にかかるのであれば、読めなくはないんですけども、他の1番の3番とのバランスといいますか、そこで気になってしまったんで、こだわったんです。

そういう誤解はないと思ってらっしゃるということであれば、もうこれ以上言う気はありません。ただ、違った言い方をなさる方がいらっしゃったら、せっかく3つにまとめていらっしゃるのに、何かもったいないかなっていうことで気になったということです。細かい話ではあるんですけど。

**浅野教育総務課長**：その点については、今まで審議会の方で、審議いただいており、その中では、特に議論にはなっていなかったです。そのままでもいいと思います。

**市長**：どうですか、客観的に見て、ほかの委員の方はどう思いますか。

**山下先生**：文法の問題だと思います。確かに誤解を生むことはあるかもしれない。「心豊かな」という連体形になっていないので誤解を生むというのは、荒瀬先生の言われるとおり。「心豊かに」という連用形だと微妙な誤解を生むことがあると思う。内容には関わらないので、検討いただければと思います。

**市長**：時間の関係もありますので、お二方の今の趣旨を踏まえて、誤解がないような表現に変えていくということでもう一度検討してください。大事な話だと思います。ということで、他の先生よろしゅうございますか。

それから 2 点目についてお願いします。

**浅野教育総務課長**：2 点目ですけども、具体的な政策について、基本計画案の中には、具体性がないということでおっしゃられました。そこを補完するために、私どもとしては、資料 2-3 で事業をお示ししております。個別具体的な事業をこの中に落とし込んでいます。そして、さらにその事業についてどのようなことを行っていくのかという事業説明の欄の中で説明しています。

**市長**：先生が指摘しておられるのは、具体的な施策という表現になってるけども、この項目は具体的じゃない。この見出しの表現はどうなんですかということです。

**浅野教育総務課長**：この表現自体は、もう少し適切に表したものに直したいと思います。

**市長**：次の別紙で一つの方に具体的な政策を書いておりますが、それとのその連動性がはっきりする表現に変えたいということだと思います。

**山本先生**：真庭市の計画の作り方があるのかもしれませんが。最初は基本目標があって、具体的な一つの理念があったのが目標になって、次に個別事業をやったので、事業というか政策というか。大中小の階層別の事業のふさわしい言葉を使えば整理ができるのではないかと思う。修正の余地というか、整合性のある、階層性のあるものにして、計画行政はそちらのほうが慣れているので。

私が思ったのは、KGI という言葉です。子どもの話が出るけれど、むしろ教師が幸せであるかっていう指標が、どこかに出てこないかなと思っていました。子どもが幸せになる前に、教師が幸せにならないといけないので、かつ、今教師の問題は深刻で。報道されてますけど、免許外の授業を受け持つとか。免許外の教員が減るような目標とかあるいは、逆に変形労働制をどうするのかわからないが、教師の仕事がリスクで、教師が気持ちよく働ける環境を、幸せになるような KGI を市民との合同で作る必要があるのでは、と思っている。指導力の向上だけでなく、教師が幸せに働けるような指標をぜひ考えていただきたいと思っています。

**市長**：3 番目、事業の一覧表が、目標と方向性と、それから一覧表その間に体系的な繋がりがあのような表現にしたらどうかという、荒瀬先生のご質問と同じだと思います。それが一点と、それから教師について、もう少し心豊かに働けるような指標をということですが。

**浅野教育総務課長**：先ほどの体系的な観点というのが少し抜けていたのかもわかりませんので、もう一度整理し直して、その上で表現を変えて直していきたい。

**市長**：教員のところは大丈夫ですか。

**浅野教育総務課長**：教員の働く環境につきましても、計画で配慮が欠けておったんですけれども、計画に入れるかどうかというところにつきましても、検討させていただきたいと思います。

**教育長**：おっしゃられるとおりです。単市でできることに限界があるというのも、一方にあると考えます。教師がやりがいをもって働くというのは大事なことなので、考えさせていただきたい。

**市長**：荒瀬先生が質問された、具体的な展開についての3点目についてはどうですか。

**浅野教育総務課長**：具体的な展開にところは、先ほどの別冊の方で書いておりますけれど、わかりやすい表現で書き添えていきたい。

**市長**：私は教育の中身に入ったらいけないので、少しだけ申し上げると、何をするかは最後は予算で決まっていきます。しかし、こういう方向で進めているということ、どこかで書くということで教育委員会は整理してもらいたい。

別冊の事業というものも、表現も含めて、もうちょっと工夫をする方がいいのかと思います。こういう考え方に基づいて、このように展開していくというようなことを、もう少し意識できるような書き方にしてもらえたらと思います。

**荒瀬先生**：私、今三つ目のことでお答えいただいたら申し上げたかったのは、例えば、10ページのところで、5年後の指標というところなんですけれども、これ全部数字が入ってますよね、KGIであるということで。これは教育に馴染みますかね、と思うんです。例えば、学校に行くのは楽しいと回答した児童生徒の割合が、小学校90%以上中学校85%以上。これは高いと言えるのかどうか、というと高いんでしょうけど、10%ぐらいはそうは思わなくても仕方がないか、というふうに私は人間があまり良くないの思ってしまう。

高等学校の教育もそうですけれども、最近はないですが、以前のホームページに堂々と具体的な大学の名前が書いてあって、その大学に合格する人数が何%以上とか、書いてあるんですね。何%受ければもういいんだっていうことになってしまいますね。これ、達成した件でみんな喜ぶんですかね。

学校に行くのが楽しいといった中学生が15%に達した、よかったよかったなって言って、祝杯をあげることはないと思うんですね。教育にもこういった発想を取り入れることは一方で大事だけど、もう一方では、よほど慎重にしないと、これは誤ったことになっていかないかと思ってしまう。同時に、さっき山本先生が指摘してくださったことなんですけれども、ここに書いてあることが、全部教師がこのように思ってるかどうかということに繋がっていくことだと思います。自分が学びたいということが学べているかという、そ

れができてない教師がたくさんいて、それでどうしようかと。これは非常にここにいらっしゃる方の問題です。

真庭の良さというのをいろんな場面でお聞きして、私も、皆さんが本当に「いいまちを作ろう」と努力してらっしゃると思うんですけども、市で独自に採用されていないとはいえ、真庭市の学校に来たらこんなことがあるんだと。例えば、実現するかどうかわかりませんが、東京都の教育長は会議の場面で、教師はサバティカル(復職して元の職に戻ることを前提とした長期休暇)を考えていくべきではないか、という発言を以前されました。最近ではされませんが。例えば、真庭に行けばですね、その素晴らしい自然があり、1年間自然の中でずっと地域の人とやっていく、無給ですけども。そういうふうな自己研鑽のあり方もありますよ、みたいな、そんなことをもっと出していただくと、同じ岡山県で働くならば真庭市に行きたいと思う先生が出てくるんじゃないかな、ということを思います。最近若い先生たちと話をすると、給与のことを非常に重要だと思ってらっしゃるのは事実ですけども、さらに重要なのが自分の時間が持てるかどうかということがあるというふうに私は感じてます。

そういったようなことも含めて、ぜひ、いろいろとこれからご検討いただきたい。これ作っても、だから駄目ですよとか、そんなことを申し上げるという気は全くなくて、ただ今申し上げたようなことを、ぜひ今後検討していただけるとありがたいというふうに思います。

**市長**：教育長、教育委員の皆さん、どうですか。

**教育長**：おっしゃられることは、よくわかりました。もちろん、10%でいいという議論では、ありません。ただ目安として、現在そこに到達してないので、5年後ここまでは満足度上げていきたいという岡山県の指標にもなってます。そういった意味で掲載をしています。荒瀬先生おっしゃったように、例えば学校に行くのが90%でいいのかというような誤解を招くようであれば、変える必要があるのかなと思います。

**山本先生**：荒瀬先生は、中教審で教育振興計画を中央レベルでの設計者の1人でもある。私は、第1次教育振興基本計画を作るときに、当時の北山会長と話して、こんなんでもいいんですかと。とにかく、さっきの話になるが、事業計画が具体化する保証が全然ない。お金に関わることは、財務省が全部一言一句を点検して書かせない。

教育振興基本計画を、まずどういう位置付けにするのか、ということ。まだ中途半端で、その中で教育委員会が迷いながら、慣れない仕事で苦勞されている。極端にいうと、もっとファンタジックなものでもいいのでは。5年間で、こういうふうになりたいというファンタジックなものを、教師とか子どもとか、住民の人を交えて作る計画がまず前提にあっ

て、それを行政としてどういうふうに事業化するかという行政計画として進行計画にしていくかとか。真庭流の新しいものを今後ですね、考える手段としてはどうかと思います。いろいろ考えてみてはどうでしょうか。

**市長：**参考までに申し上げておきます。教育委員会の方も努力していて、例えば学校給食公会計化をすることによって、給食費を集めたりという、そういう事務は学校からは基本的になくす。教員なり、あるいは職員の教育の方にかかる時間を少しでも増やすとかですね、いろんな努力をしてくれているということも申し上げておきます。

**荒瀬先生：**委員会の皆さんや真庭市の皆さんにケチをつけようとは全く思ってません。山本先生がおっしゃいましたけど、私は徒手空拳で、いろんなところにいろいろ申しますけども、基本なかなかうまくいってないという現実の中で、真庭に対して夢を感じるんですね。

市長を存じあげてるってこともありますけれども、本当に、真庭市から具体的に日本の教育の一つの在り様みたいなものが提示されていくとすると、素敵だと思います。ぜひそういったことになれば、それこそ国レベルで話があったときに、岡山県の真庭市はこうして、真庭市でもできるんだから、どうして他はできないんでしょうね、という話ができたら。みんながまた知恵を絞って少しでもより良いものを求めていくっていう、そうなったらいいなと思っていて。余計なことを申しましたが、頑張っていってほしいっていうのも当然わかっておりますし、大変だと思うんです。今コロナもありましてですね、本当大変だと思うんですが、ぜひ元気で、子どもたちの学びが深まっていく、その学びを支える教職員がしっかりと取り組めるようにお願いしたいと思います。

カスタマーサティスファクションということで、サティスファクションという言葉がありますが、カスタマーサティスファクションの対語がエンプロイーサティスファクション、働く人の満足。働く人の幸福がなくて、そこでサービス提供を受ける人の幸福、満足はあり得ないだろうと思います。教育の場面ではなおさらのことだと思いますので、教育委員会が元気になっていただいて、学校が元気になって、子どもたちが元気にあるという、そういう流れができればいいなと思ってます。

**市長：**大岩さん、元教員でもあります。どうですか。

**大岩 C：**元教員でいつか教員に戻りたいと思っている。ぜひ教師たちが、仲間たちが、楽しく、心豊かに過ごせるような、そういう教育環境ができれば、また戻りたいと思っています。こういう夢が広がるよう、アイデア出しの時にはぜひ呼んでいただければ、大変楽しみに行きたいと思っています。

一方で、こういういろんなものを検討させていただいてる中で、データバンクとドウバンクという言葉に出会いました。いろんなデータというかこんなアイデアを実行していく実行

部隊として、こういう具体的な政策のお手伝いができることを楽しみにしております。

私の周辺でも、子育て中のお母さん 2 人が保育士の免許の勉強して取りにいきたいとおっしゃっていたり、自発的な子育てサロンを立ち上げたりしておりますし、そこに自然保育の部分を取り入れたり、幼児教育に保健教育のようなものを取り入れたりすることをどんどんやっていきたいなという、夢広がるお母さんの話を聞いてたりすると、元教員っていうだけではなく、発言を流せない。

例えば、この具体的な政策の一覧 3 ページですね、①番の郷育を核にしたキャリア教育の中で、将来の夢や目標を持っていると回答した児童生徒の割合、小学校 85%以上、中学校 18%以上になっている。本当にこういうことができたなら幸いなと思う一方で、地域の方から、職場体験学習がちょっとマンネリ化していてどうかならないんだろうとか、そういういろんな悩みごとが寄せられたりします。地域が学校を核とした地域作りとか、地域に開かれた学校、そういう議論の中で、地域と学校がもう一度出会い直す、そういう場所をいろいろと作っていただけたらなと思っておりますので、今後ともよろしくお願いします。

もう一つ、次開いて 4 ページの④番ですね。地域資源の再評価の新たな価値の創出です。文化遺産を活用すると書いてあります。私は蒜山に住んでるんですけど、茅葺きの御堂がいっぱいあって、集落内に。中には朽ちていくものもあります。そういうものを例えば蒜山で、SDG s な視点で、茅が注目されているのであれば、ぜひそういうものを老若男女総出で、地域の風景を守るということでやってきたりとか、そういう何か夢が広がっていくような取り組みが行われるお手伝いできたらいいなと思いつつ聞いておりました。

**市長**：他にどうですか。

**吉野 C**：私も教育振興基本計画の委員として入らせていただいた。文章の中にも書いてあるんですが、これから少子化とか人口減少、日本中ですが。その中で特にここ 5 年とか 10 年以内に、真庭市の小学校、本当に小規模校が増えていきます。複式学級も増える。そのことに対して、それこそ先生方がやりたいけど人手が足りないとか、コミュニティスクールにして地域と連携して方向性も出ているが、どうすれば小規模校でも全ての子どもたちが生き生きと学びを続けることができるのかと言われてる。

小規模校を廃校にするかどうかは、行政ではなく地域が決めるという話もその委員会の時に話が出たけれど、ただそれを地域に委ねるといふ以前に、小規模校を取り残さないために、行政側としてなにができるのかということを考えていく中で、真庭らしい真庭にしかできない教育が実現できていくのかなあという気がしております。

月田小学校の校長先生は、特に中学校に入ったらいじめの問題が多い。そのため

に、なにができるかを考えると、結局小学校時代に学校間の交流の場と時間をどれだけ担保できるかということも大事だと思う、とおっしゃられた。いろんな形で学校が小さいからしょうがないねということで、消えていくことが、このまま放っていくとどんどん起きていきます。これから真庭市は全校コミュニティースクールになっていきますけれども、その時にどういうふうに地域と一緒に子どもたちを育てていって、その中でも小規模であっても取り残されない、あるいはほかの学校ときちんと連携できる交流できる、自分たちが少人数であっても誇りをもってやっていける、先生方もいい教育ができるという環境を作っていくように。これから正念場だなと思っていますので、議論していただいて、ぜひ具体的な施策を出していただきたいと思っています。

**市長**：このようにさせていただきませんか。基本的には、今の方向で、ご指摘のあったようなことを修正する。体系的にもう少しわかるようにした方が、表現も含めていいんじゃないか。それから今のコミュニケーション関係も、もう少し深めたりとかですね。教員についても。全体の中でそういう文言の加筆修正をして、会議をもう一度することなくご了解いただけるようにしたい。

教育長、これで合意というのは、ちょっと議長として強引すぎると思いますので、そのあたりもう少し改善修正していただくということにさせていただきませんか？

本当に教育の難しさというか、それから荒瀬先生がおっしゃるように、これは財政を持ってる責任者としても悩むところですけども、財務省はやり過ぎだとは思いますが、しかし、その中で文科省の悩みも本当によくわかるんですね。書いてもそれが財政的保証がないからできないんだということになる。しかし、できることしか書かないのであれば、本当の方向性や夢のあることができない。これは文科省の、あるいはそれに携わってる皆様方の悩みだと思うんです。

私は基本的にはこれを尊重いたしますけれども、もう少し加筆修正していただいて。基本方向はこれでということで。今まで積み重ねた成果もありますので、それを前提にということで。よろしゅうございますでしょうか？はい、それではそうさせていただきます。

### ○真庭市の教育環境の魅力化について

**市長**：その次に3点目は、教育環境の魅力化というので、これは県立高校ということも前提にした話ですが、今後も、より高校とも岡山県とも協力しながら、魅力的なものにしていくということで、自由闊達な高校魅力化についての議論をお願いします。そういう議論も材料提供ということで、報告をお願いいたします。

**教育長**：資料3をご覧ください。前回、義務も含めて教育全体で考えなきゃいけないというお話でした。



教育の魅力は、中身もあるんですけども、一番大事なのは多くの人に関わっていくことで、地域を子どもたちにとって誇りに高めていくことが大事なんだろうと思っています。同時にそれを発信していく。

大事にしなきゃいけないのは、誰にとって魅力なのかということを確認しておかないといけないなと改めて感じている。まず、子どもたちにとっての魅力でないといけない。同時に、保護者、地域、教職員にとっても魅力でないといけない。とりわけ高校魅力化ということを視野に入れた場合、それが同時に真庭市以外の方々の魅力でないといけない。それで真庭らしい教育の魅力化の姿ということで絵を描きました。

今まで進めてきたことと変わりません。この場でご議論いただいてきたこととも変わりません。いわゆる郷育、地域学習を大事にしていこう。共に学ぶことを大事にしていこうということです。これをずっと支えていく家庭教育を大事にしていこうということです。

一方で感じるのは、自然豊かな地域で、のびのび子どもを育てよう、教育をしようというのは日本中どこでも同じことで、真庭らしさ、真庭だからできる学びというのを今後しっかり考えていかなければいけない課題として感じている。同時に、今までの議論が、就学前、小学校、中学校、高校が中心だったんですけども、新たな課題として、これは生涯学習の体系の中に位置づけた中で考えていかなきゃいけない、ということが前回提起されている。あくまでも例示ですが、真庭全体を学びの場としていく仕掛けや仕組み、こういうことを考えていくことが今後必要だろうと考えます。

学校に限らず、社会教育の場でも生かしていけるもの、コンソーシアムが提供しているプログラムを考えていきたい。困りごとというものは、基本的に人を繋ぐ力があります。ボランティアやお手伝いを気軽にできるように、募集する仕組みを作っていく。そうした中で、教育を受ける者も喜びますし、年齢に関わらずそういうものに関わる人が生涯にわたり有用感をもって暮らしていくことにつながる。言い換えると、全員が生徒になったり、全員が先生になったりする関係性を、生涯学習体系の中で考えていくことが必要なんだろうと思っています。

続いて、これが今日のメインですが、高校の魅力化についてです。15歳の意志ある決定を応援するということを書きました。そのためには、前回議論になったように、義務教育段階でのキャリア教育を推進して、なりたい自分でありますとか、自分なりに価値ある生き方を描いて高校進学につなげていく、選んでいく生徒を育てることが大事だと考えている。その際に、真庭市内にある高校が選択の対象として輝くことが大事。だから、魅力化なんだろうと思っています。

そうしたことを前提にして、現状は2ページの下に記載しています。若干、打算的というか戦略的で、教育内容だけではありません。今年の4月以降の調査段階の希

望、市内からの進学希望調査です。一番右端が定員です。二次調査の段階ですが、真庭市内の中学校の卒業見込み者 49.3%が市内の学校に進学を希望している。勝山高校の普通科ですが、市内から 96 名、市外を合わせて 111 名。定員が 160 人ですから、このままいくと学級が落ちます。これは資料をご覧ください。

平成 29 年度以降の市外からの入学者割合で、令和 3 年はここ数年では一番低い。学科再編という年です。現状として、入学希望という点では共有できる唯一の資料です。課題は、具体的な教育の姿がメッセージとして届いていない。教育環境全体としての魅力づくりというのをこれから大事にしていけないといけない。3 点目は市外へのアプローチが不十分なのではないか。

アプローチの方向性を 3 つ。一つ目は、わかりやすい、伝わるメッセージを生徒と保護者の手が届くところに届けるということ。教育内容の充実が一番ですが、中学生と保護者はなにを期待して、高校は何をすることで応えていくのかということを磨き上げていく必要がある。二つ目は、暮らしそのもので、学び育つ環境を考え実現していくこと。高校生は学校で学びますけれども、暮らしそのもの、生活そのものが学びの場になっていくことが大事だろうと考えています。寄宿舍に限りません。いろんな生活の可能性があると思う。その暮らしのなかでいかに育むのかということ、これは大きな視点ではないかと思えます。3 点目は、人を集める経営戦略を描く必要があるのだろうと思えます。市内の卒業生が全て市内の高校に進学しても、市内高校の持続は非常に厳しい。市外からも入学希望者を発掘しないとけない。じゃあ、どうするのか。今までは、人口増を前提として高校が運営されてきた。これからは人集めの戦略が必要ではないか。生徒自身が自ら魅力を発信する場、これは学習や生活の場があります。高校生自体が市内で学ぶことも大事だが、市外と繋がって学ぶことも大事。市としてできることはやっています。高校生の姿が見えるように活躍の場を作り出すことも大事。それを、真庭市や企業があらゆる媒体を使って発信していきたい。

課題ばかりですが、情報提供をしました。

**市長**：ここからは、自由な議論でありますけども、教育委員さんは高校が輝くためにということで、発言してください。

**常本委員**：今日はいろんな勉強をさせてもらった。今教育長の方からこういう提案が出てきました。

確かに、地域と本当に繋がりがやすい真庭市だと思いますので、これは継続してやっていきたい。市以外の人とも関わって行くのかと思っています。

近所(津山市)の小学生が学校へ行き帰るときに、寒い半パン T シャツで走るの、元気でいいと言うんですけども、今の子ども達はどうかだろうかな、と思う。中学生

高校生になったときに、将来の希望というものをどういうふうにもっているのかな、と思う。同じように、我々小さいときには、何か都会に出れば、夢があったような気もしたんですけども、地域の勉強もしてなかったなと思う。

今、少子高齢化ということで、地域と一緒に教育を考えるのは良いことだと思います。

私は義務教育ぐらいまでに地域のことを知るというか、地域の職業を仕事を知る勉強とか、その勉強した後、地域の課題を見つけて、問いを立てて、解決するにはどうしたらいいんじゃないかな、というふうな勉強も15歳ぐらいまでにできたら非常にいいかなと思う。そして高校を選択して、高校でも課題を解決するような学習をやっぴり続けていく必要があるのかなと思う。

ここにある提案の中では、地域とのつながりはだんだんと濃くなってきました。応援団ができるようになりました。あとは大学との繋がりがいるのかという思います。真庭市には大学ございませんけれども、大学の中や研究の場所とか、何かこんなことができるとか、大学がちょっと来てくれるような施設とか、何かあったらそこには大学生が来ます。高校生と大学生の繋がりができるようなことができればいい。

以前県南の私学の学生が来て、高校生と一緒に考えることもあった。岡山大学と繋がれるような。いつも身近に大学生と接する。授業の中に、例えば大学院生なんか来て、一緒にやっていく。大学院生も教員希望があれば、総合的な探究の時間で一緒にやれば勉強になる。

地域社会の人もそうですけれども、大学生というモデルでもあれば、高校生もまた違ってくるのかなというふうに今私は思っています。

**有元総合政策部長**：大学のお話を今していただきました。真庭市は岡山大学それから県内の工学部が中心になりますけど、森林であるとか、山林経営、木造建築、デザインについて、その素地として真庭市に珍研究学習ができるような拠点を作りたいということで、進めています。ゾーン構想です。実際もう構想の域を出てですね、岡山大学は、グリーンイノベーションセンターというものを立ち上げて、情報関係の研究もやりたいということで。そういうことを含めて、真庭市にそういう拠点ができた場合は常元委員の言われた方向に行くつもりです。高校生も一緒にやる。

それからもう一つ社会人。リカレント教育。一緒になって地域の人がそこに集えるような環境を作っていきたい。最初は少し実学というよりも研究系のことになるかと思うんですけども、真庭のフィールドを使って、実業学習的な動きというのもやっていきたいと、我々としては考えていて、岡山大学の方もいろいろ要求がありますが、真庭市としても、そういうことをぜひやってほしいと要求していきたい。

**徳山委員**：お話の中にも自然を生かすとか、地域と連携をしていくとか、教育の連続性ということ、これが本当に真庭市で教育の魅力になっているんだなというふう思いました。

それから吉野さんおっしゃったんですが、これが教育力の維持にも繋がっていくんじゃないかなあと感じておりました。課題として、そうしていくために学校現場の先生方の意識がどうなんだろうかと。地域に向かっているのかなあというのを思います。これは学校差もかなりあるんじゃないかなという気がします。

それから、地域の方はどうなのか。地域の人はどうなんだろうと思う。私はボランティアで関わりが多いんです。本当にこれ役に立っているのかなと、成長に繋がっているのかなと。ちょっと不安というか、達成感が持てない。つまり、それがないと次に繋がってこないと私は思っている。達成感、子どもたちの役に立っているというのを、どうやって味わうのかというのが大事。非常に工夫してボランティアを増やそうとしてるんだけど、一部になって広がっていかないんじゃないかという不安があります。そこら辺をこれからどうしていけばいいのかと思う。

地域を繋ぐ何か、そういう仕組みが必要だと思っています。地域学校協働本部とか、学校運営協議会もできるということなので、そこである程度進むんじゃないかと思うんですが、それだけでは私は不安だなあというふうに思っている。そこへ何かもう一つを支える仕組みがあれば、持続的に地域との連携が繋がっていけるんじゃないかなと思います。

**吉野 C**：郷育魅力化コーディネーターの大岩さんと私が、まさにその繋ぐ役目をしなければいけないと思っております。まだ去年から始まって、私も学校を回り切れていません。大岩さんは高校に、私は勝山小学校や中和小学校などに入っています。

真庭市の場合、5年以内にすべての学校をコミュニティスクールにするという方針だけは決まってる。学校を回っても、コミュニティスクールってどういう形にしたらいいか、先生方の戸惑いがある。当然保護者もわからない。学校運営協議会という制度ができればそれで良いのか。徳山委員が言われるように、それでいいのかっていうところは私も非常に疑問です。

一歩先にコミュニティスクールになった中和小学校では、学校運営協議会というよりも、総合的な学習や探究学習の中で、本当に教員も変わる、子どもも変わる、地域も変わる。三者が共に育ち合いながら授業を作っていくことをここ数年しています。校内研修にも地域の方も入られるし、それを受け入れられる校長先生がいて、教員の皆さんもそこでまた学びを深めながら面白いと思う。ようやく地域と学校の信頼関係ができて、それが子どもたちの主体的な学びにつながっていくという成果が少しずつ出てきた。

市内のいろんな小学校が非常に魅力的な総合学習しているが、その中で、やり方がわからないとか、地域の人と一緒にどうしたらいいのかという先生方もたくさんいらっしゃる。真庭の特色ある教育のネットワークづくりのようなものを仕掛けていって、お互いの情報交換とか学びあひとか、お互いの魅力などいろんなことを情報共有ながら一緒に進めていくような、そんなものを作れたらいいと話していた。まだ夢物語の世界だけど、これからまた教育委員会の皆さんと話しができたらと思っている。

さっきも小規模校を取り残さないということを言いましたけど、一つ一つの学校が学校の中だけでは解決できないとか、来られている先生も真庭市内で生まれ育った先生ばかりじゃなくて地域外から来られている先生もいて、どうやっていくかは一緒に悩みながら進めていきたいと思っています。。

**井口委員**：学校訪問をしているが、子どもの成長ということで、知徳体にどこも取り組んでいる。幼稚園保育園もそうになっている。高校だけ、それがはっきりしないなと思った。高校は大学進学のための高校だったり、就職のための高校だったりする。生涯学習になっても、知徳体となっている。けれども、教育に関わる人がみんな頭の中で知徳体を構成できれば、それを高校でできたら、就学前から高校まで繋がるので、その辺を整理したらどうかと思います。

市長さんと話すと、やっぱり財政が欠かせないと思う。コロナでもなんでもそうだけど、経済界が大きな存在になっていて、経済的なことも考えないと進まないということがあるので、数字というものが必ず必要になってきて、教育はなかなか数字では測れないが、データとして測ることも大事だと思いました。

最近、今こそ学ばないといけないと思う。たくさんの情報やちょっとしたことに社会が流れて行ってしまうので、過去のことでもなんでも、とにかく学ばないといけないと世の中を見て思っている。計画にもいろいろ書かれてあるけれども、根幹にある「学ぶ」ということがどうやったら定着するのか、そういうことをきちん 5 年間で変えていかないとけないことだと思う。

**山下先生**：教育長から、2 次の高校の希望者の調査結果が示されましたが、蒜山が 25 人というのを見て、ちょっと元気が出ました。定員割れしてるのは変わらないけれども、少なくとも現在県内で実際に受験してくれるかは別ですけれども、25 人の希望があって、経営ビジネスが 31 人、食農生産が 37 人。いずれも定員割れだけれど、数字の経過を見ていると、来てくれた子どもを大事にすることによって次の芽があるなと、私が校長ならそう思います。

看護の 9 人というのは、実は県内に看護の高校は 5 校あって、全国的には珍しい状況です。定員割れしていないのは倉敷中央だけで、どこも厳しい状況。ここについて

は、看護の高等学校がぜひ要るんだということを地域、医師会も含めてどう考えるかっていうことにかかっている。

蒜山校地と食農と経営ビジネスはセットで考えていけばいいんじゃないかと思えます。例えば、単位交換制度とか。私も実は、久世校地がなくなって農業をどうやってやっていくんだろうと思っていた。蒜山に行けば、そういうことも可能ではないかと思う。真庭高校よりも蒜山のほうが知名度が高い。会議のときに倉敷の副読本を見ていたら、倉敷の小学校4年の副読本は、真庭市が8ページも説明があります。ペレットとジャージー牛と蒜山大根。ただ、そこら辺の知名度の高さを使って、うまく単位互換と連携すれば、打って出られるのではないかと思う。普通科は別建てで作戦を考えて。少なくともこの3科については、ちょっと微増にしても、何か明るい兆しで、これを使わないといけない。やっぱりディテールというか、勝機がある。そういう意味では、私は正直言うと今年の志望調査はちょっといいと思いました。

最初にご指摘のあった、真庭を愛する人。私は、真庭高校にいるときに、真庭を愛する人というのは、大人のエゴだと思っていた。大人のエゴを、いかに子どものお得、利益にしていくかというところに地域と学校の責任があると思っている。それをこういう場で話し合うこと自体が、真庭市の先見的なところだと思っています。

小中は市教委と繋がってます。県立高校は市教委と繋がっていないので、何か事業をやろうとしても、市の支援をまず基本的に期待できなかった。それが市が支援してあげて、連携しましょうって言うてくれて、そこに教師のやりがいがある。さっき荒瀬先生から質問があったり、山本先生からもファンタジックなという話もありましたが、高校の教師に関しては、教師が市の支援や連携をいかに教育に生かしたかという質問やアンケートはどうだろうかと思う。アンケートっていうのは、メッセージでもある。教師自身が市の連携をありがたいと思って、それをどう教育の中に落とし込んだかという質問をどこかですべきだと思う。

SDGsを表明している市として、私はもうそれこそジェンダー平等とか地域の問題はたくさんあると思うので、それをまさに教育に生かしていく。そういう趣旨として、オリジナルな教育もできるのではないかと思います。

**市長**：今の関連で、蒜山に関わっている大岩さん、そして山本先生、そして荒瀬先生という順番でお話ししてください。

**大岩 C**：勝山高校蒜山校地で全校生徒41人ぐらい。私は週1回勤務している市の職員という立場です。

土曜日、蒜山みらい会議という名前で、地域の方と外部講師陣と皆さんが集まって、蒜山地域の未来について意見交換と、高校生たちの地域学の成果発表を兼ね

たものが開催された。学校の先生や生徒、それから地域が話をして、ポジティブにこんなふうになっていったらいいよねって話が出ておりました。

その中には、小規模の施設、生涯学習センターみたいなところで地域の経営のようなことが学べたりする場所に学生寮などがついていて、小中学生が勉強を学べる公営塾のようなものがあるとすごいなあと、そんな話が出ておりました。徳山先生がおっしゃった、先生の意識とか地域の意識とか、地域学校運営協議会をどういうふうに支えていくのか、そうやって地域の方と一緒にというか、地域作りを進めていくみたいな枠組みが進んでいくことを願っております。

常本委員がおっしゃったみたいに、大学との繋がりということで、開催ができなかったんですけど、3月の中旬に企画中で、蒜山中学校で「だっぴ」という名前の意見交換会、座談会を開催します。地域の方と中学生、高校生で、そこに大学生がファシリテーターとして入るという結構秀逸なモデルだと思うんですけど、延期して開催したいと思っております。これを勝山中でも似たような取り組みをさせていただいたり、そういうものを通じて、地域との連携が形だけではなくて、実際に子どもたちの意見を直接聞きながら、アクティブに発信していけるような団体になっていくツールとして使っていただけたらなと思っております。

井口委員が言われるような知徳体がつながった姿が、ロールモデルとして大学生を見た小中学生があんな風になりたいなとか、そういうふうに繋がっていくとすごくいいのかなと思って聞いておりました。

山下先生の話にすいません戻りますけども、真庭では形成できないキャリアを求める生徒たち、高校生がいた場合、その生徒たちが、東京に夢をもって進学していくとか、国連で働きたいから世界に出ていくということは、すごく素晴らしいことだと思うんですね。一方、エッセンシャルワーカー、幼児教育・保育とか、看護とかに関わる生徒たちが学べる環境があるということは素晴らしいことだと思うんです。ぜひそのファーストキャリアとしてそうやって人と関わるようなエッセンシャルワーカーになって、その場合の処遇改善の話がちらっと出てましたけど、そういうかなり大きな話が真庭高校看護科の周辺には出てくるのではないかと思います。

そういうところを地域の事業者さんとかと一緒にワイワイと。不確かな未来で正解は何もないですから、共通解はないので、最適解をその地域と地域のステークホルダーと一緒に作っていける話ができる座談会というか、そういう寄り合いをたくさん開いていくことで糸口をつかんでいけたらと思っております。

**山本先生**：今日、吉野さんや大岩さんの話を聞いて、こんな素晴らしいコーディネーターがいらっしゃるんだな感銘を受けました。センスがいいと思いました。

15歳の意志ある選択を応援するんだとありますが、15歳に意志ある選択をする能力を身に付けさせる教育をしていくという問題があって、これはリアルに見る必要がある。15年間どういう風に子どもを育てているのか、抜本的に反省する必要がある。本当に意志ある選択をする教育を皆さんしているんですか。学力調査の点数がいいとか悪いとかに一喜一憂して、それで意志ある選択ができるの？こういうことを考える必要がある。キャリア教育という言葉が私は好きじゃなくて、なんでキャリアという言葉を使うのか。人生を考えさせるということでしょう。

人生を考えて、自分の人生は何をもって幸せということをやっぴり15年間考えてほしい。そのために、親も教師も子どもと一生懸命に付き合ってるのか。子どもの幸せは100人いたら100通り違うのに、何か一つの数値基準で、狭い世界に封じ込められている。ここを抜本的に教育界も社会も考えるべき。最近東大の前で事件を起こした高校一年生とか、共通テストをスマホで撮って回答しようとした学生がいたけど、彼らは本当に15歳の時に人生の選択をしたのか。人生の幸せがわからずに本当に苦しんだんだと思います。彼らや彼女たちの問題ではなくて、かれらが作り上げた妄想みたいなものを考える必要がある。だから、15歳に意志ある選択できる子どもを育てる、その一言でいいんじゃないかなっていうぐらいに思います。

ここにある意味主要なテーマだと思うんだけど、15歳以降の高校がもしなくなると、その地域は完全に崩壊する。ある意味では地域の死活問題で、総力を挙げてどうやって高校を支えるか。高校の先生は地域のことを考えるのはすごく不得意で、そういう癖のあるキャリア生活を送っている。市民としては別ですけども、高校の先生として地域のことを考えたことがないので、そのことについてはすごくストレスもあって、プロセスがないと地域のことを考えられない。すべて新しい学習。先生方には、地域の面白くて豊かな人に出会うことで、この高校で働く自分の人生が豊かになるよねというようなことを実感してもらう必要がある。

高校の先生にお願いしたいのは、うちの学校に来たら絶対子どもの人生は幸福になるよねと言える、中身をもってほしいし、そういう確信を持って、地域を語れるような中身を作るようにしてほしい。

もう一つは、地域の方は、うちの地域の高校に来たら、みんな幸せになるよと。学校はちょっと困るかもしれないけど、ここの地域で暮らすと本当に豊かな生活時間になると語れるような地域にしてほしい。

実は私、大阪観光大学の再建をやっているんですけど。理事長が詐欺をやって地に落ちた大学を再建するのは大変だけど、結構学生は育てている。皆さん驚くかもしれませんが、今私立大学入試なんてほとんどないわけで、大学に行きたいという学生みんな



な入れているんですね。高校で勉強したこととか、どんな成績を取ったかは関係なく、入れているんです。でも大学の先生はみんな自信を持っているんですね、育てることに。実際育てているんです。それは徹底的少人数だからです。大手の塾の人が言うんですが、ブランドの私学に入れても人は育ちませんよ。小さい名もない私学に入れて、丁寧に育てた学生は塾から見ても立派に育てている。だけど親も学生もそんなことで大学を選択していません。まさに選択する能力がないから。ブランドで選択する。高校の先生もブランドの大学に入ると良かったねという。

私は真庭高校の校長にも勝山高校の校長にも先だって会ったので、しつこくうちの大学を売り込んで、一人でもどうですかと言うんですけど、なぜ言えるかという、うちの学校に来たら学生が幸せになるよ、と私自身が確信をもって言えるから。そういうふうに、校長先生、学校の先生、地域の人と言えるのであれば、今他が惨憺たる状況だから、選ばれる地域で学校になると思います。

**荒瀬先生**：言い出すと切りがなくなってしまうんですけども、基本的にですね、キャリア教育という言葉が好きか嫌いかという私は好きです。キャリアの定義というのをきちんとなしなといけない。一般的なキャリアという言葉は職業経緯ですが、学校現場で違う意味で使っていて、その違う意味が好きなんですけれども。ただ誤解を招くという点ではちょっとキャリア教育という言葉を使い続けるかどうかというのは、また考えたいと思うんです。それ以外のものにつきましては、今山本先生がおっしゃったことを大変賛同いたします。

知徳体という言葉があって、日本の教育というのはこれを大切にしてきたということなんですが、誰が大切にしてきたのか、っていうのを今の振りかえる必要があると考えています。これを大切にしてきたのは大人たちなんですね。ちょっと誤解を恐れず申し上げれば、それはある種、これまでの価値観において大事にしてきた知徳体を子どもたちに伝えよう、それが子どもたちの幸せになるはずだと信じてやってきたわけですね。悪意なんか全くありません。善意でやってきているわけで、今もそれが相当部分続けられています。

ところが、その与えられたものをしっかりと受けとめるっていう力、これはこれで大事ですけども、それをあまりにもつけた人が、自分から課題に気がついて取り組むとか、あるいは自分で出かけていって何か新しいものに会おうとする、といったような部分が弱いんじゃないかということに、だんだん気がついてきたわけです。なんでもかっていうと、そういう場面が、大変この頃多くなってきて、例えばこのコロナでもそうですけど、誰一人として生きてる間にこれこういったことを経験したことがないものに今出会って、右往左往したわけです。世界中で右往左往したわけですね。こういったことも含めて、これからどんな思いでやるか、世界規模のものもあるかもしれないけれども、当然個人規模のものもあ

りますよね。それは実は今までやってきたわけです。

ただ、親が言う通りの人生を歩んで、親が選んだ人と一緒に暮らして、親が用意したところに住んでという生活でできてる間は、全く問題はないんです。けれども、そうでないことで生きていくってことをする、せざるをえない人たちが非常にたくさんいる中で、与えられるのを待ってるだけでは、これはもうどうにもならないので自分で考えなければなりません。この人と一緒に暮らすかどうかということも含めてですね。そういう選択はもちろんこれまでもしてるわけですけど、もっといろんなものに対してそういう選択をしていかなければならないとすれば、「意志ある選択をすることができるための取得単位」というのはどういったものかというのを考えて、それを与えるという話ではなくて、もちろん助走は横にしなければいけないかもしれませんけれども、ライダーと一緒に引っ張っていったら、後はもうどうぞ自分で飛んで行っていう、そこに繋がるような教育をしていく必要がある。高等学校教育って、多分そこが非常に重要に今後なっていくと思います。

義務教育は、あくまでもすべての国民がこの内容についてこの程度にまで学んで力をつけておく学力というものがあるので、それを身につけるために義務教育というものがある。9年間それでやっている。

ところが、高等学校教育は果たしてどういうものかっていうと、高等教育でもなければ、義務教育でもないという極めて中途半端です。ご承知のように、高等学校教育ってのは教育基本法には示されてないんです。本当にどういうふうに捉えていくのかよくわからない。それもあって、実は学習指導要領は必履修単位というのを相当小さくしてますし、必履修科目にいたってはさらにちっちゃいわけです。もっと、例えば地域に根ざすとか、あるいはグローバルな課題に対して取り組みを、今まで教科書があって、教科が決まって、先生が考えた教育課程の中で、生徒はただ一生懸命やってテストの点数が良ければ良かったよかったようなそういう高校教育ではない高校教育を、どこがやっていくのかという、なかなか始められないでいるわけです。

具体的名前を出してしまうとよくないかもしれませんが、例えば、岡山県には岡山朝日高校という学校がありますけれども、岡山朝日の相似形、あるいは津山の相似形の高等学校を作ってる分には、相似形であるから、言ってみたら、なんか変な言い方をしますけれども、本家みたいなのに当たるところの教育を受けたいとみんな思っていて、あと諦めて諦めて諦めてっていうので、行けるとところに行くというふうになってしまいますよね。そうじゃなくて、今言いました「与えられる知徳体」ではなくて、「自ら身につけていこうとする知徳体」が用意されるような教育課程を、ぜひ真庭ではやってほしいと県立高校に強く働きかけていく。その代わりに、地域も含めて、例えば全国から子どもたちを呼んでくるとなったら、こんな教育できるよっていうふうな夢のある話にもっていく。

そういうようなことができるためには二つの条件があって、これは地域の理解が必要ですし、もう一つは、もちろん県教委の理解も必要なんですけれども、地域の教育委員会の理念が大事だと思うんです。

私、真庭市教育委員会はそういう理念持ってらっしゃると思いました。三ツ教育長をはじめとして。ぜひそういう真庭で行う新しい高等学校教を考えていただいて、もちろん今はその学習指導要領の範囲でないといけないんですけど、学習指導要領内で相当できるわけですね。ですから、さっきこれも山本先生が触れてらっしゃいましたが、コーディネーターの2人も本当に素晴らしい方だと思ってお聞きしておりましたが、そういう形で地域とどう繋がっていくかということ。以前は高校で地域とつながるなんて普通できなかったわけです。ところが、今は高校の先生は苦手かもしれないけど、コーディネーターがいらっしゃったらできることがあるわけで、これは山下先生に言うと叱られますけど、具体的にこれまでは考えられないようなことがもう今はできるようになってるわけですから、ぜひ真庭の高校教育はどういうを目指すのかというのを考えていただいて、それを具体的に実施していただくといいんじゃないかなと思います。

**市長**：本当にこの議論はもっと深めたいと思います。

**吉野 C**：今おっしゃられたお話に感銘を受けました。まさにその通りだなと。真庭市が与えられたものではない、自ら身に着ける知徳体というお話がありましたが、そういうものを幼小中高、すべてだと思いますが、真庭市全体でそこを目指していくんだっていうような辺りを理念として持てば、本当に新しい教育をできる。

**市長**：それじゃいろんな刺激的な話を今いただきました。まだまだ深めていって、そしてまた、高校とも岡山県教育委員会とも十分話をしながら、やっていきたいと思えます。

やはり行政やっておりましても、当たり前ですが、最後地域を担っていくのは人なんだと、本当に痛感しております。

100年に一度のコロナ、こういう自然環境の問題も含めて、いろんなことが起こってる中で、自分たちの地域を自分たちの頭で考えて、地域を安全で豊かにしていくということが、本当に大事である。また、そういうことが地域の未来を創っていくことになる。財政のことも確かにあるんですけども、私は人が豊かに暮らしていくために、自分を磨いてく、そしてまた地域の他の人と連帯していくということお金を惜しむつもりはありません。そういう姿勢で行きます。また皆さんのお知恵をいただきながら、真庭だけではだめですけども、いい地域にしていきたいと思えます。

教育長に一言お願いします。

**教育長**：本当に幅広い範囲の話でした。

まず、この地域とか子どもたちの将来を描く意思を、教育委員会がきちんと固める。

	<p>同時に、身内だけの話じゃいけないですし、具体がどこにあるかはわからないんですが、それを元に本当にしっかり対話を重ねる中で、市民というか皆さんと共通の話題を作っていくということが改めて大切だなということ。そして、既存に捕らわれずに、新しくチャレンジをしていけるっていう、私としてはメッセージをいただいたと思います。</p> <p>得意なことはそれぞれあるんですけど、それぞれの得意をつないで新しいものを作っていけたらいいなと感じながらこの時間を過ごしました。</p> <p>高校魅力化の話だという思いもありましたが、結局教育をこれからどう描けばいいのかな、ということをおみんなで議論したんじゃないかなと思います。</p> <p>どうもありがとうございました。</p> <p><b>市長：</b> ありがとうございました。</p>
経過及び結果	<p>調整事項</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・<b>真庭市幼児教育施設整備方針について</b>（市長部局提案）        基本的内容は合意し、以下の修正を行う。        計画の位置づけのところに、公立・私立も両方ともの方針であることを追記する。        幼児教育とそれ以降の小学校以降の連携を明記する。</li> <li>・<b>第3次真庭市教育振興基本計画について</b>（教育委員会提案）        基本的方向性はこのままで、以下の点について再度検討し、教育委員会としての案を市長に提示する。        計画の柱のうち「真庭を愛し、心豊かな「ひと」をつくる」の表現を見直す。        KGIについて再検討する。        「具体的な施策」の項目名を内容について、体系を含めて検討する。        小規模校に関する施策を再検討する。        教職員の幸せについての観点を入れる。</li> </ul>